

99

## 戦前・占領期を含む沖縄の平均寿命の年齢構造

—水島生命表, 琉球政府生命表を用いて—

逢見 憲一

国立保健医療科学院 生涯健康研究部

【目的】 沖縄（県）の平均寿命（0歳時平均余命）の年齢構造を、第二次大戦前および占領期までさかのぼって経時的かつ定量的に分析する。

【方法】 沖縄と全国との平均寿命の差を、各々の生命表上の生存数および平均余命から年齢別寄与（年数）に分解し、時系列に沿って観察した。

【資料】 沖縄 戦前：水島治夫 府県別生命表 占領期：琉球政府 第1回生命表（1955年）、1960年簡易生命表、1965年簡易生命表、1975年以降：都道府県別生命表。全国 戦前・占領期：完全生命表、1975年以降：都道府県別生命表。

【結果】 1. 戦前 水島生命表による沖縄の平均寿命（1921-25年、1926-30年、1931-35年）は、男が各々46.32、45.97、47.23年、女が50.53、50.49、51.82年であった。いずれも沖縄が全国を上回っており、その差は男4.26、1.15、0.31年、女7.33、3.95、2.19年であった。しかし、平均寿命の差に大きく寄与していたのは0歳すなわち乳児の死亡率であり、その寄与はそれぞれ男5.50、4.35、3.38年、女4.93、4.05、2.97年であった。その結果、0歳を除いた寄与は、男-1.24、-3.20、-3.07年、女+2.40、-0.10、-0.28年と、ほとんどが負値であった。各時期とも男60歳以上、女40歳以上では年齢別寄与はおおむね正値であったが、幼児から青壮年には負値であった。

2. 占領期 琉球政府生命表による沖縄の平均寿命（1955、60、65年）は、男が各々66.41、68.02、68.91年、女が72.54、74.65、75.64年であった。いずれも沖縄の平均寿命が全国を上回っており、差は男2.81、2.70、1.17年、女4.79、4.46、2.72年であった。0歳の寄与はやはり大きく、それぞれ男1.97、1.54、0.71年、女1.86、1.31、0.52年であったが、0歳を除いた寄与は今度はすべて正値で、男0.84、1.16、0.46年、女2.93、3.15、2.20年であった。1歳以降の年齢別寄与は、戦前と同様に幼児から青壮年は負値、中高年以降は正値であった。

3. 1975年以降 都道府県別生命表（1975～2005年、5年毎）による沖縄と全国の平均寿命の差は、それぞれ男0.36、0.95、1.39、0.63、0.52、-0.07、-0.15年、女1.95、2.72、2.95、2.40、1.86、1.39、1.13年であった。0歳の寄与は、戦前・占領期とは反対に男女ともほとんどの場合わずかに負値であった。1歳以降の年齢別寄与は戦前および占領期と同様に、幼児から青壮年は負値、中高年以降は正値であった。

【考察】 戦前・占領期・復帰後を通じて、沖縄の平均寿命は総じて全国より高かったが、戦前および占領期には0歳（乳児）の寄与が大きく、特に戦前は0歳を除いた寄与はほとんど負値であった。戦前・占領期の沖縄の乳児・新生児死亡については、届出漏れが多く信頼できないことが、水島生命表を作成した水島治夫自身をはじめとする衛生統計・公衆衛生の専門家によって指摘されており、今後は復帰後の乳児・新生児死亡、ひいては中高年以降の死亡率についても批判的に検証する必要がある。また、沖縄の平均寿命が長いことを“自明”の前提としている現在の沖縄長寿研究も、統計の面から再検討すべきである。

さらに、幼児から中高年は負の寄与、高齢者が正の寄与を示す構造は戦前から現在まで長期的にみられており、巷間の“沖縄の現在の高齢者世代は健康で長寿だが、中高年以下の世代は不健康”という解釈も再検討する必要がある。